2018年11月号
FP武蔵野グループ

柳沢　志賀子(AFP認定者)

スマート農業

6次産業を初めて5年が経った。
ハーブ茶3種と期間限定品1種。取引先も8社から11社に増え少しずつではあるが、売上を伸ばしている。
離島キッチンを通して早稲田大学のゼミ生と交流を深めた年でもある。
その分、加工場での仕事が増え、畑へ行く時間が少なく、夏場は草ぼうぼうにしてしまった。
9月になっても草取りに時間を割くことができずにいた。

一時的な救世主
9月になり友人の娘たちが大学最後の休みを利用して加計呂麻島へ遊びにきた。
よく遊び、よく働いてくれた。
畑の草取りをしていた時、「草取り結構たいへ～ん」と言いながらしりとりをしながら楽しそうに最後まできちんと草取りしてくれた。
「自動草取り機あるといいよね」という話もでてきて、ほんとにそうだと思った。
調べてみると、中山間地域の多い中国・四国地方の農業者に関心のある技術を聞いたアンケートでは、畔畦や法面の草刈りが１位だった（農業新聞より）
　来年の春には就職が決まってる彼女たちにとって、最初で最後の経験かもしれない。加計呂麻島での草取りやハーブ茶作りとご褒美のシュノーケル体験、SUP体験がこれからの人生の経験の糧のひとつになればと思う。

農水省は来年からスマート農業加速化実証プロジェクト事業を始める。
　農水省は４年前に「ロボット技術や ICT（情報通信技術）などの先端技術を活用し、

超省力化や高品質生産などを可能にする新たな農業」と定義。
最新技術で農作業を高度化し、担い手不足の解消につながると期待している。

スマート農業が目指す方向性

１．　超省力・大規模生産を実現
　農機の自動走行・ドローン・収穫・給餌などの各種ロボット
　トラクターなどの農機の自動走行
　圃場のセンサー制御、ドローンを使った圃場管理や農薬散布
　畜産でも自動給餌器、遠隔監査の発情、分娩検知、餌寄せや自動搾乳のロボットなどがすでに実用化されている

２．　作物の能力を最大限に発揮
　栽培・飼育のデータ化、圃場のセンサー制御などセンシング技術の活用、
　ビッグデータを圃場管理に使用（農地航空写真や気象）

３．　きつい危険な作業から解放
　アシストスーツ・除草ロボット
　水田の水管理の自動制御

４．　誰しもが取り組みやすい農業を実現
　農機のアシスト装置、データ化やAI（人工知能）による栽培ノウハウの標準化

５．　消費者・実需者に安心と信頼を提供
　生産者から販売、消費、輸出までのデータを統合するスマート・フードチェーンシステムの構築

問題点
　農機の自動走行では、ガイドラインはできているがまだ整備が必要なものが多い。
　データ関連では、個人データの流出。
　システム化が進むとメーカー間の互換性。
　自動走行やドローンでは、もっと使いやすくするための規制緩和が必要。
これからまだまだ解決しなければならないことも多い。

９月には準優勝を果たした金足農業に農林水産大臣から感謝状を授与したというニュースもあった。理由として「農業系高校や農業への関心を高め、特に若い農家に勇気と自信を与えました。」とのこと
国がいかに農業に力を入れているか、若者に期待しているのかわかる。

実際、都道府県に農業大学校もあり、農業に関心のある若者が増えている。
　30 代で脱サラして 1 年間神奈川の農業大学校へかよい、白いトウモロコシ（雪の妖精）やきゃべつ、ミニトマトなど生産して 4 年目の農家さんと話をするチャンスがあっ

た。
学校を卒業することで、土地を借りることが出来るシステムになっているようだ。
同じ大学校で出会った 20 代前半の彼女と今年結婚して、将来農家レストランや販売をしたいと夢が広がっているようでした。AI などがもたらす未来の農業。今までとは違う想像もつかない農家が増えていきそうだ。

農家さんの未来を見据えたプランと足元を固めていくプランを同時に考えられるＦＰになれたらと思う。

以上